

會



報

1966年5月

251

日本山岳会

秩父の金山平に据えられた木暮さんのレリーフを初めて訪れたのは、昭和三十三年の十一月上旬だから、もう十年近くも前のことだが、その翌年の四月に長男をつれて瑞穂や金峯山へ登った折も、碑の前まで行って、日本のこの大先達のことを息子に知らせることを忘れなかった。その頃は小さな岩場に佐藤久一朗氏作のレリーフがはめこまれ、その側に松方さんの説明文を墨書した木札が立てられていたが、その後碑も新らしくされたこと聞いたので、是非もう一度たずねたいと思っていた。

偶々

木暮さんの手紙

望月達夫

去年の九月藤島、村尾両氏と小川山へ行った途次訪れることを得たが、場所も前のとことと少し違い、例のレリーフは立派な石の台座に丁度金峯山に相對してはめこまれ、その裏側に故人の略歴などを記した銅板がはめこまれてあった。これなら木暮さんを記念するに足るいい碑だと、誰も異論はあるまいが、欲を言えば何か灌木のようなものが周りに少しほしいようにも思う。それと、碑前から眺めた金峯山の山懐が、伐採のためすっかり荒らされてしまったことを、木暮さんの霊は何んと見るのかと、いささか気になるのである。

先日、古い手紙などを整理していたら、木暮さんから戴いた一通の書翰を見出した。いったい個人の尺牘の類をみだりに公表するのは、必ずしもよいこととは思わぬが、既に遠逝されて二十数年を経たのだから、こゝに発表してもさうお叱りは受けまいと思う。

拝復 再三の御手紙にて恐縮至極たとへ名だけに止まるとはいへ會長の名を汚す上は、責任を果すが当然に有之候へども、実は北支に出征中の倅義去月十三日より共産軍討伐隊に属して、山西の各地に転戦致し居り、毎日の新聞紙上に同郡応召者の戦死の報告など引続く有様に、何とな

く心懸りて書くことに気が進まず、幾度か筆を取りては止めに致し、終に今日までぐずぐずに打過ぎ、相済まぬとは思ひながらどうしても書く気にならず、誠に意地のなき次第何といはれても申訳なき次第に御座候。昨今やや戦争も下火の様子に候処、今度は奉祝の仕事に追はれて、十二日の市の祝賀終了迄は寸暇もなき有様、其後ならば書く気にもなるかと存じ居り候。本日武田君よりの来書によれば、来月はどうしても何か喋らねばなるまいとの事、これもいやで／＼仕方なけれど、さりとて辞退出来ぬとすれば、其方にて理

合せて頂き度と勝手ながら願上候。但し十二日後になりても会報発行に支障なきや否や覚束なく存じ候まま事情申述候。

十一月九日夜

望月達夫様
木暮理太郎

封書の裏面には牛込区市ヶ谷台町一八とあり、貼付された東郷元帥の緑色の四銭切手には昭和十五年一月十日の消印がある。

昭和十五年というと、その五月から私は会報の編集をやらされ、十二月号が丁度一〇〇号になるので、その巻頭に當時會長をしておられた木暮さんの原稿を是非頂戴したいと考え、再三お願いの手紙を書いたものとみえる。その返事が右の手紙なのであろう。奉祝の仕事は偶々紀元二千六百年の祝賀が東京市で行われるについて、多

年市に勤められた木暮さんも、そのことで格別に御多忙だったものと推量する。

会報一〇〇号には遂に木暮さんの原稿は載せることが出来なかったが、手紙にも見えている「来月はどうしても何か喋らねばならぬ……」云々は、同年十二月十日丸ノ内蚕糸会館講堂で催された山岳会主催の紀元二千六百年記念講演会のことと、それには横有恒、武田久吉、冠松次郎の諸氏らと共に木暮さんも演壇に立たれ、「登山五十年」と題して充実した内容の講

演をされた。会報一〇一号にその簡単な報告がのっているが、



更に講演の内容は「山岳」第三十六年第二号の巻頭を飾っている。それはともかく、私にとっては丁度父親ぐらゐりも年齢のへだたっていた木暮さんとは、入会して間もない私などが、平素そう親しくお付き合いしたわけでは無論なかったが、馳け出しの会報編集者の無様な原稿催促に対し、今にして思えば全く頭の下るような鄭重な返書をいただいたのである。この節「山岳」の原稿依頼などで返信用のハガキを同封しても、どういふ訳か、ナシのツブテで何の返事もくれないような人とは雲泥の差が感じられる。木暮さんが全生涯に亘って日本山岳会に傾注されたものは、計り知れぬ程大きい、そうした態度の一端がこの書簡からも充分うかがわれるように思う。

この序でに書き加えるが、前記講演会での武田さんの演題は「秘境秋山郷」というもので、なお数回の実地踏査後に「山岳」に書かれる旨が記されている。近來私は日本の辺鄙な山地に殊に興味をもつようになった。武田さんの秋山郷がまだ活字になっておらぬなら、是非執筆をお願いしたいものである。

(二頁へ続く・目次も二頁)

私は戦前一年余と戦後の苦難の時代に約二年ほど会報の編集にたずさわった。それだけに会報にたいしては、日頃私なりの愛着や感慨をもつものである。初めて編集にたずさわった時は、入会後僅か二年位のときで、めくら蛇におじずと言われても致し方ない。近年若い層からの会報編集者に窮しているやに聞かすが、もっと若い人達が進んでこういう仕事に当るべきではなからうかと思う。

若い有為の人のやるに値する仕事といつて過言ではなからう。二五〇号の発行も近いことをきき、故人の古い尺牒を引合いにして、平生思っていることの一端を述べてみた。

(一九六六・三・二五)



山川勇一郎さん

のこと

小野 幸

昭和四十一年三月九日「アンデスの水河に眠る山の画家・山川勇一郎遺作展」は無事終了。会場の東京新宿の伊勢丹から「みなさまの絶大なご後援をいただいた上、読売新聞社を中心と

する報道活動も効を奏しまして、予期以上のスケールに盛りあげることができました。会期中は駐日チリ大使をはじめ、連日内外の知名名で賑ひ、延一万八千名の来場者を得たばかりか、出品デッサンの全部及び油絵の大半を売却する好成績を納めることができました。云々」という礼状をいただいた。

山川勇一郎君がチリの中央アンデスで消息を絶つたとき新聞に出たのは昭和四十年十一月の中旬であった。私は遠い国からの、しかも通信に不便な山の中の出来事なので、追いつけ明いニュースが出るだろうとその日を待つことにした。彼は、チリに滞在していたが、たまたま大阪府岳連のメンバーである岳友クラブ中央アンデス登山隊に同行、ロス・バルデス地区ローマ・ラーガ水河にもうけた第一キャンプ付近で、十一月九日午前十一時以後行方不明となったのであった。

それにしては気になるので新聞に出た翌日山川君のすまに電話したら、弟の新二郎さんが（長崎造船大学）がたまたま研究のため東京留学をされ、東京大学に通われておつたので、電話口でお話することができた。新聞に報じられたことのほかはわかっておられぬが、チリ大使館をおして聞いていただいているというのである。とりあえず彼の関係している日本山岳協会関係で深川久弥会員、日本山岳協会は私と幹事二名、一水会の連袖会からは高田誠さん、それからまたまたチリで共にくらし写真家の飯山達雄さんたちが誰言うとなく山川家に集まることになった。

彼の遭難が確報としてもたらせられたとき、私はほんとうにがっかりしてしまつた。彼のようなよい男が、こんな早く昇天せねばならないのか、もっとも作品を見せきれなかったのかと。彼をとりまくグループの友人た

ちもこんどは彼の遺骨（実は遺灰）の到着をまつて追悼式の会場を決定せねばならなくなったのである。はじめは私の友人の横川善さんをお願いして上智大学の礼拝堂をお願いしたりしたが、国際文化会館（東京麻布）が最後が、決定され、十一月二十九日盛大な追悼が行われた。会場では金山政英（在チリ国大学、石井鶴三（日本山岳協会）、深田久弥（日本山岳協会）、中村琢二（連袖会）飯山達雄の諸氏の思い出話があった。会場には彼のスケッチ、チリのカラー写真が掲示されていたが、松方会長は「こんな美しいところにいたのではどうせ帰つてこないよ」と幸福であつたらう彼をしのんでくださった。

○

彼、山川勇一郎君とはじめて知り合つたのは戦前の初夏の上高地であつた。きれいな絵をかく人だなあ、とその時感じた。安井曾太郎先生を知つたのは、それから彼が華北に行つていた時であらう。そうした関係から先生のお弟子のグループ連袖会に入り、そのまゝ一水会に出品するようになったのである。戦後、日本山岳協会が再開されたとき彼は幹事役をおおせつけられていた。「おやおや君まで世話人にひっぱり出されるんじやないへんなことだね」といったことがある。「そうだよ、おえら方ばかりでうごいてくれないですよ」という。なお聞けば三輪孝君（故会員）も共にやつていて、三輪君のところが、会の事務所になつてゐるという。それはよいところを選んでね、と言つたが、まあめな三輪、温厚な山川のコンビならよいと思つていたら、「お前さんも絵がすきなんだから事務でもつたつてくれ」というのである。知らない仲じやないで、その時から私も山岳協会に入つて、山川君と又おつきあいが始まつたわけなの

であつた。

昭和三十八年の秋だったか、彼はチリへ行くんだという。きけば船会社知人がいるので、その関係から行きたいというので、外国旅行案内を見せたりした。大きな外国が見たいのであったらう。さきに深田会員たちとジュガールヒマルに行つていたので、またエクスペディション病がおこつたんだね、といったものである。

彼は頭がよくってしまえば、何も言えなくなつたが、あくせくない紳士画家であつた。いつ、人に会つても相手にいやな感じをいだかせないといふことは中々できぬことであるが、彼はそういう数少ない部類であつた。でも絵についてはきびしきつた。これにはまったく頭がさがつた。一見やさしく見える彼の作品もその底には職業画家として立つている自信ときびしさを感じさせてくれる。それが私にはとてもたのしく思つていたのである。

○

この間、私のところへ飯山さんが見え、私にチリの日本人会の会長の常川久太郎さんという方からの便りを見せてくださった。それには山川君の遭難の経過のありさまをこまごまと記してあつた。

「十一月九日から十二日まではいへんでした。それから遺灰（熱が強い）ためにほんとの灰となつて終う。墓地内に立派な火葬場があるのには驚きましたし、山川さんのように死んでナマの死体をすぐに焼いたというは初めてなんです」となつて送りまうすまで、新聞、ラヂオもニュース毎に報道するし、智利山岳部の救助隊、警察隊の出動、軍からはヘリコプターを出してくるし、たいした協力ぶりでした。平素クレバスに対する注意を若い隊員におしえておられた人が、油断はど

随想 目次

木暮さんの手紙	望月 達夫	1
山川勇一郎さんのこと	小野 幸	2
SAC会員歓迎会	成瀬岩雄	3
文部省の登山観	山本朋三郎	6
海外登山報告		
中部チリ(II)	久野英一郎	4
アコンカグア	橋村 一豊	5
特別寄稿		
穂高の稜線	孫 慶 錫	6
図書紹介		
川内山とその周辺(望月)		8
足引(古沢)	山の出(小野)	9
会員通信(深田、五十嵐、村山)		10
主な海外登山(一九六六年)		11
台湾の入山許可は		12
富山県登山条例		12
支那情報(富山支部)		12
新着ジャーナル紹介		12
雑報		12
チエウ隊の活動・ジョン・ハーリンの死・ヒンズー・クシュ・フエゴ島・コーカサスの高峰		13
会務報告		14
新入会員・計報・会員異動		14

こにあったのでしよう。絵をかくためだから、例の如く漂々と一人で行動をしておられ、雪の平原のような最も平凡な所、穴もないような所に丁度からだ一つはいるような五、六十センチの穴へ。それも雪でおおわれていて見えなかつた。何のこととはいへ、マンホールの上に立つたら足もたらスッポリ落ちたようなものではないでしようか。ごくせまいクレバスでそこだけが体がはいれた。それでも十八メートルばかりで、S型、中途に画板がひっかつていた。

引揚げた時は三日半三晩、全身凍傷。まだ脈は二〇一二位あった由。人工呼吸をし、若い隊員のジャンパーを着せたりしたが、二時間ほどで息を切られた。あがる時は足がクレパスに食い込んでいたので、ビッケルで足もとをこわして持ちあげたとのこと。それでも遺品がないかと探しに入ったら、例のセミの写真機と帽子が、遺体があった所よりも四、五メートル下になんと広い所にあったそうで、そこにはチョコレートを食べたり、便をした跡もあった由。もし落ちた時、画板が穴の外にでも投げ出されていたら早く見つけられたらうに。

発見がおくれたということは、反対側には氷の壁ですばらしい景色、先生はそこが大好きで、日本へ帰つたら銀屏風にそれをかきたいから、今のうちにスケッチをする、と平素言っておられたし、その近所が最も危険が多いので、その辺ばかり見ていたのに、まさか最も平凡な所で見つけたとは。今度の登山隊(注・大阪府岳連)だって大使館では始め断るつもりで居られた、それを隊員に私方の知人が一人いて、それが手紙をよこして、用意は出来た、それがおちへ行ったらよろしく、と書いてきた手紙を山川先生に見せたら、これを断るのには気の毒だ、私が大使を説いて見ましようと思きかけ、眠つてた書類を引っぱり出して、係りを吉村君に代えたりして来智に成功したものだから自分のことのようによこさうと、ベースキャンプで画をかくんだと子供のようによここんでおられた。

この智利へ三か月のつもりで来て、一年十か月も滞在して、みんなに好かれて、好きな山で死んだ。何だかそこにあきらめというようなものがあるのではないかと思われす。(略歴)一九〇九一六五。神戸一中を

経て東京美校を昭和九年卒。昭和十六年応召、同十八年現地除隊後二十一年帰国まで華北で描く。安井曾太郎氏に師事。日本山岳協会、一水会、連補会などの会員。本会は昭和三十一年入会、会員番号五七〇七。(四一、四一八)



SAC会員歓迎会

会員番号 865

成瀬岩雄

スイス山岳会
会員でチューリ
ヒ出身のグブラ
ーさんが戦前永
らく北大の教授
として札幌にお
られた事につい
ては一部、本会
会員も御承知と
思う。

戦後の来日は
今度三度目ではあるが今回は同氏夫妻を含めて一行八名の来日で「六名がスイス山岳会の会員で、何れも六十五才以上の者はいた……」と云う便りを予て貰ったのでグブラーさんとは旧知の積、麻生、小生が中心になり本会の有志十数名を以て四月四日夜、芝パークホテル内北京マンションに於て歓迎会、否、交歓会と云つた方が適格だった集りを催した次第である。

も同様と云う組合せで円卓を囲み当方より松方会長が立つて歓迎の言葉と当方側各人についてのエピソードたっぷり紹介があり、之に對しグブラーさんより一行として全く予期せざる温き歓迎会であると御礼の言葉とスイス側各人の御紹介があり誠にやかな雰囲気、山によって結ばれたこの交歓会については感激深きものと、モノ柔かな口調で語られ、当夜出席の多くの者が且てはスイスに遊んだ者も多いので自からスイスの思出話に花も咲き各テーブルとも終始なやかな談笑を楽しんだ。



事、私事に渉るが……。小生は其の昔、大正天皇御薨去の頃だったと思うが……。東大嶺から梅森山へとかけて「峠」の駅で上り列車を待っていた時の事……。大体、あの「峠」と云う駅が、スッポリ深雪に埋められて、まるでその辺に取り残された様なチッポケな寒村の小駅で、僕等はとて「好きな駅」として親しみを抱いていた所だったが、もう夕闇も迫つた時刻に汽車を待つ客として殆んどなく、駅のストロブを囲んで仲間とグリンデルワルダールードを口づさんで大いに「吹雪に暮れる山村の小駅」を味わっていた時だったが偶然々此処に鉢盛山から下つて来られたグブラーさんと、同じくスイス人で福島高商のドイツ語の先生ワッセルさんが来合

わせた、我々の調子外れのグリンデルワルダールードでも御両人の郷愁感を聊かなりともさそつたら話し合いが初つたのがキツカケでそ

の日は五色へ帰る我々と福島へ帰られる御両人と我々の怪しげなドイツ語「Auf Wieder Sehen!」、板谷の駅で別れたのだが、その数日後、正月を吾妻山麓黄製錬所の小舎で迎えた我々は、又此処で偶然にもこの御両人と邂逅、今度は期せずして「Auf Wieder Sehen!」の実現に思わず握手を交わしてしまったのだ。その夜はワッセルさんからスイスの大学の卒業式の歌やエンメンタールリート等を聞かせて貰つたりして翌日は一緒に東吾妻から中ノ沢へ越え、中ノ沢でも一緒に泊つて以来特に親しくなり、其後、僕の方から札幌のグブラーさんの家を訪れたりグブラーさんが上京の折は電話で呼び出されたりして益々親密を増し今日に及んでいる。当時、グブラーさんの家はヘルベチヤヒュッテの設計者、グリンデルさん——矢張スイス人——の設計によるものだとは聞いていたが、円筒形の、石油タンクがサイロみたいな形の変わった家であつたが例のボブラの樹なども植つていて如何にも柔かい感じのする、札幌の地にはマツチした建物だったが今はどうなつたろうか。又、北海道では亡くなった山崎先生とは特に親しくして居られた、ヘルベチヤヒュッテ建設当時は御両人で盛んにスキー、登山を楽しまれたり或は、北大生と知床、千島等に足を伸ばす等日本に於ける山の思い出は仲々豊富なのである。

昨年、グブラーさんから来たクリスマス・カードはチューリッヒの湖を見降す丘の同氏のシャレーの写真であつたが今は此処で悠々自適の生活を送つて居られるが今回の来日のスケジュールを聞いて見ると一行が日光見物される間にグブラーさん夫妻は北海道に飛べられ、北大の連中と旧交を温められると云うのだから同氏にしても矢張北海道は余程なつかしい思い出の地に違いない。

C3からの登頂途中から見た
セロ・アミスタード（友情峰）



他の八名は
休養。
十二月十
七日（晴）
松本、中
は撤収を終
えBCに帰
る。他は休
養。
十二月十
八日（晴）
BC撤収

セロ・アミスタードから見たネバド・ファンカル・スール



（以下八頁四段へ）
松本、憲茂24
隊長 久野英一郎38
副隊長 井関 将人29
隊員



左（大）ファンカル・チコと
右中央がネバド・ファンカル・スール

アンデス便り

一アコンカグア 橋村一豊
一の南壁に思う

拝啓、日本山岳会東海支
部のアコンカグア攻撃
は、一月に高木健太郎隊
長（名大医学部教授）か
ら代って不肖が隊長とな
り、一月二日より南壁
の登攀を手がけていまし
たが、先刻電報でお知ら
せした通り、二月二四
日、現地時間午後八時、
四名のアタック隊員を頂
上に立たせることに成功
致しましたので、お喜び

下さい。アタック隊は、橋村、原、市
川、黒山）
ルートは大体フランス隊が初登した
時の中央尾根にとりましたが、個々の
部分では可成り異なる処もあります。
全員凍傷にもからず、全く無傷で元
気ですから御安心下さい。
偵察の開始から登頂まで三五日間、
長い苦しい登攀の連続する毎日でした
が、幸い天候とチームワークに恵ま
れ、どうやら良い結果を得ることが出
てきました。
われわれの最大関心事は、フランス
隊のように全アタック隊員が、「よく
登った」というよりは、むしろ「よく
助かって、壁から抜け出られたものだ」というような登り方をせず、もう
少し計画的な行動が、とれないもの
か、ということでした。
従って具体的にいいますと、フラン
ス隊が、その困難さの故に放棄したC
3を上部水河の上に建設し、これを頂
上攻撃の拠点とすること、これがこの
計画のポイントでした。普通の七〇〇
〇m級の山とちがうことはキャンプを
一つ出すということは、何分行動が総
て四級とか五級とかいうグレードが当
てはめられるような難しい岩場や、水
壁において終始するため、荷上げの困
難さが、予想はしていたものの、可成
り手ひどいものであるということとし
た。
このことを予想し、われわれは日本
から充分な登攀用具（四〇〇〇mのザ
イル、一〇〇〇本の各種ハーケン、三
〇〇個のカラビナー、埋込ハーケ
ン、他にオーストリアから最近開発さ
れたDischraubというネジ込み式
アイスハーケンなど）を持参し、結果
的にみますと、ザイルはその八〇%以
上をフルに活用し、二〇〇〇m近くを
固定用に、あるいは難しい場所での空
中ケーブル用に使いました。そうして

苦勞に苦勞の末、ようやく二月一八
日、上部水河にC3を建設しました
が、それから五日間は、全員余りの疲
勞のためアタックが出来ず、ようやく
二月二三日前記四名を頂上へ向けて送
り出したようなわけです。
その代り充分なアクリルマイゼーシ
ョンと、フランス隊に負けぬようにと
日本で訓練を重ねた登攀技術をもっ
て、二日間（一ビバーク）で頂上に
立つことが出来ました。われわれは同
じルートをBCへ戻ること予定して
いたのですが、（1）上部の岩壁に雪が
来て全てアイゼン着用に登らねばなら
なかった。（2）フランス隊は靴で登って
いる悪場。（3）上部の雪後の雪が不安
定で、技術的に危険が多かった。（4）
ビバークの夜、強烈で寒い風雪が続い
て、不眠の夜を過ごし、隊員が疲れ
た。以上の理由で往復は止め、下山は
ノーマル・ルートを採りました。
われわれが頂上に立った二日後から
は、アコンカグアには完全に秋が来
て、ビバークの夜降った雪の上に雪が
積り、毎日それが増加している状況
で、壁は日増しに真白になりつつあり
ます。われわれのアタックは、最後の
チャンスであったわけですが、
今回はドイツ、オーストリア、アル
ゼンチン或いはイタリア隊などで、ア
コンカグアは大いに賑わいました。南
壁も別のルートから、われわれの前に
二回登られました。しかしその困難さ
の故に、フランス・ルートに手をつけ
たのは日本隊だけでありました。われ
われはこれからいろいろの後処理をし
てから、パーティーを分けてパタゴニア
に向いたいと思います。帰国は本隊が
五月初旬になると思います。 敬具
四一・三三・ブエンテ・デル・イ
シカにて、日本山岳会東海支部アン
デス遠征隊長 橋村一豊
松方三郎様

下山開始。一八・〇〇全員グランサル
トのデボ地に帰る。
十二月十九日（曇）
松本、浅川、中、簾、友田、マリ
オ、アゼンデの七名は、小屋跡附近の
残留資材の荷下しに向う。
十二月廿日（曇）
休養の予定が一日早く馬が来たので
直ちにキャラバン開始。
十二月廿一日（晴）
予定より早く一八七〇m着、小羊料
理を存分に味う。
十二月廿二日（晴）
アルファルファルで小型バスに乗
り、夕方サンチャゴに帰る。
尚初登頂に成功した峰の中、ネバ
ド・ファンカル・ス
ルはそのまゝとし、
他の五一五〇m峰は
セロ・アミスタード
（親善の峰）と呼ぶ
事とした。
隊長 久野英一郎38
副隊長 井関 将人29
隊員

（5）



☆穂高の稜線☆

—訪日韓国登山隊—

隊長 孫慶錫

大天井の山荘は間近。ゆつたりした稜線上の山路は、心行くばかりの山行がたしめる。何かの緊張も、又、心どよめくはりつめたばかりの過ぎしの登攀とは違った、情景そのものをたしめる時間である。

いつ間にか太陽は槍の肩にかゝつて天上沢はもう暗い。北鎌尾根の稜線と平行しながら大天井の尾根をつめると、やがて黒部、立山の薄暗い山頂が手近くなるようだ。もう登山は終わったのか。とも思い違われるやうな心地がしながら、過ぎた十日間の山行が、何んのくたたくもなく頭に浮んだ。

× ×

韓国のソウルから東京羽田迄二時間、釜山から北九州の小倉迄は船でも十時間足らずで着く。のせば手がとどくやうに近い国でありながら、遠路の家出より重苦しかった。身支度と、はて知らぬ遠き国へ出るやうな思ひの長き日々が過ぎたのである。思えばもう二年前である。日本山岳会の折井健一理事より、竹田吉文理事の、来韓が知らされ、その歓迎の場で日韓両国岳人の交流の話が出た。然し「すぐに」と組まれぬすじ通しが、心とは別に長い日をついやしたのだった。

一九六四年の初冬が最初の計画であ

った。時折、東京オリンピックで我々の渡りがひかえきみとなった。翌春、激動する両国会談の事情は、春山も放棄せざるを得なかった。その上にそのつど、若き現役の学生リーダー連を中心として組織した訪日登山隊は、彼等の入隊となり又、再度の始発点にもどってしまった。

然し、和らぎつゝあるムードのつて秋山が決定された時には、予定の滝谷ロックも、又、西鎌尾根の縦走も変更され、大天井を過ぎて常念に至るプロムナードに決めた。

韓国山岳会の理事であり、現役陸軍少領である、定水成と、ソウル山岳会の理事、安光玉の三名で組織した委員会は、隊長としてソウル大学校山岳会の会長である柳洪烈博士をうながし、日本の二回目である韓国電力株式会社、南宮基（ソウル大工科大学山岳部OB）、韓国商業銀行の全仁昌（延禧大

山岳部OB）、全権原（韓国山岳会委員）、李相吉（中央日報）等計八名で結成した。平均年齢は隊長を除いても三九才。各々所属山岳団体ではリーダーをしている中幹であり山歴は20年近い。これで、北アの変化しやすい気象の秋山の縦走が可能であらうか。名分ははつきりとした。「多くの日本の山岳人に会い、共に語り、又出来るなら北アを二週間の予定で無理なく登って帰り、新たに若手を送り出さう」

我々が国内で雪山山岳会に登るつもりで皆一同が使用中の装備を準備し、食糧も国内で準備する事、ただ目標が外国であり、船で渡るのみだと思ふ気易さは、日がつるのと共にひし／＼とその遠さを感じさせられた。せつかくの休暇を意義深くするためには、ぜいたく拔きにするプランを立て終り、あの待たされた査証を得て玄海灘を過ぎる時は、丁度満月の秋夜であった。すべてが熟したのであった。

省文部省の山登

昭和17年11月17日の日記より

……朝日新聞夕刊の鉄筆欄に過日、学徒体育山岳振興会席上に於て文部省の役人が、「最近の学生山岳団体の登山傾向が低山趣味に墮している故、すべからず、高山峻峰へ挑戦させねばならぬ」と言つた事に對する、加藤某なる人の投書が載つてゐる……

『学徒練成の元締めたる、文部省特に体育振興会の山岳部役員達の時局認識の低調さは一驚した。……視察の旅費をせびつては、趣味的な自己満足第三者に誘導する以外、何等の意味のない冒険に学生を走らせることを以て、学徒練成と心得てゐるらしい。今日吾国の山岳界に痛切に要望されることは、登山の爲に登山すると言ふこと』

日本山岳会六〇周年記念祝賀会は椿山荘で開かれた。その前日、夜半に東京着の一行は、出迎へる山仲間につれられ宿につき、折良くもこの日に招かれたのであった。日本の山仲間とのつどひ。知らされ、知る名の岳人と一緒に、語りうるのだ。和やかな山人の集いは、身近き友人として親しまれたのであった。

数々の北ア資料は、秋山は何時吹かれるもの知らないという。それで、重裝備が必要なのだ。パーティーを三分けて、西穂より奥穂、前穂より奥穂、又、横尾通しに涸沢を経て奥穂に集結する一段階の登山がすめば、涸沢水圏帯でキャンプ停泊、それから槍ヶ岳迄二段階。その後は大天井から常念をすぎ上高地へ帰る為、食糧は四区に分かれ、ポッカする事にした。然し何時吹かされてもよいやうに予備食を別梱包したりリニクは、30Kをこえる重荷となつた。久振りにどなつてばかりおつた

様な、自由主義的登山理念を一擲して国家的に登山使命を活かせと言ふことである。（中略）『国の爲に山に登ると言う理念を確立して（中略）直接に軍の方針に呼応し、然後に新鋭武力を蓄積すると言ふ処へ、其の方向を向けねばならぬはずである。（中略）』

『従つて、登山を道義とする（中略）学校山岳部は徹底的に解消し、登山を、学校の軍事教練の中に包含せしむる必要が有る。……冒険心をかき立て、観光意欲や自己満足を第三者に誘示する以外何等の意味の無い、国家的には全く無用な山歩きを指導方指と爲す、体育振興会の山岳部の幹事は、国の爲に山に登ると言ふ、行軍力の強化、銃後に新鋭武力の蓄積、国家的登山、と言ふ『超非常時下の登山理念』の悟人を致し、山道業者を一人も残さず『徹底的に』学校山岳部と言ふ様

連中が、どなれる番組になつたのだ。念のためにと会であつてくれた山仲間として、法政大のリーダー島居君と、青山大のリーダー斎藤西君と上高地についたのはケシコウナギの落葉深き晩秋の十月下旬であつた。もう先発隊は二日前につけて焼岳、徳沢等へ歩いたとの事であつた。

落葉樹の黄ばんだ色とりと、杉、樅の茂み、闊葉樹の紅葉と相まじつた、大正池のほとりは、別天地の情景であつた。

上高地、秋の染めが、きわどく美しかった。神河内山荘は山へ行く人々の語りににぎわい美しかった。梓川の清流をひかえた明神岳から前穂、西穂の稜線は、晴れた秋空にくっきりとその岩肌を見せ、燃ゆるが如き紅葉の明神池のほとりと相は、幽境は又別段と深きをそつてくれる。次は新雪を頂いている例の三段染であらうか。急斜面の前穂パーティーが発見し、

な団体は解消させ」ねばならぬ。此の後に小生の批判が長々と書いてあるが、これは、新宿武蔵野館では、ルイス・ストレンカー主演の『肉弾山岳戦』上映。伊勢丹で、『東京共栄園衣服展』開催中。ビールつまみ付きで、バーで一円四〇銭也。配給の菓子、一人当20銭。キャラメル二個一二箱に非ず。ヌガ四個、ビスケット小四枚。

四一・三・三〇

山本朋三郎



横尾組も出発して西穂へ向ふ。梓川に沿つてやがて玄沢を右手にする。今日は、西穂山荘迄でよいのだ。私にとつては二回目の北ア山旅であつた。それで急ぎのない山路はとうとう夕日が焼岳越しに沈む時、山荘についてしまった。村上さんに迎えられ、再会の語りは夜が更けるも忘れなかった。先程トランシーバーで、岳沢に、横尾に皆安着との事でもあり明日の山行も忘れての語りはつひに皆寝静まる夜半まで、山荘の間をラテルネでともしたのであった。

ハミツの山路は遠く独逸途づいておる。登り一方にあへぎ、朝日が山稜に照りはる頃は、もう汗ばんでしまった。上り下りの稜線越え、PIより始まった無數のピークを越えたつもりだが、未だ西穂岳迄は程遠い。北側の深いキレ込みに高度感を感じながら、浅い新雪は足下に不安にする。時おり休んでは笠が岳、抜戸のどつしりした

山肌を眺めながら、やせがまんはするものの昨夜がたまって、肩にはまる重さは一際である。「こんなはずではなかったが」とは、もうおそい。やがて西穂岳のケルン場では、どつとすわりこんでしまった。仲間が案じてくれるものの「いゝ事昨夜のウラミ返し」で横目をゴロつかせてニヤ／＼である。

リーダーの辛さで、休みたくも、休めず又登る。間の岳、天狗岳と、次第にせり上ったやうな急斜面が、行手に立はだかって、仲々ビッチがはかどらない。滑りやすい新雪のガラ／＼路は一層不安をつくりその上によせてくるガスが足下をかすめる時は、少なからずのたちろぎさを感じられる。

何時であらうか、快晴の秋空に一ぱいひろがったガスが天をささぎり、まるで、夕暗が急にせまってきた。天狗のケルンでビバ／＼と落着いたのは午後四時になってからだから、そのノロ行程は我ながらあきれたものである。然し、万一の場合にそなえた装備に不足はなかった。予定行程がおくれたわけは、各バ／＼に告げたのであった。吹飛ばされたケルンの避難小屋にデントを張り終えた時には、前穂から奥穂へのすばらしい尾根が眼前にくりひろがった。

馬の脊をこえて奥穂についた時は、全員が早や集結して、我々のみを待ってあった。二〇センチの積雪は足もとを没する。然し又集結したのだ。一人でバテたリーダーの身を案じてくれる仲間間の眼ざしが、いつとなく暖かい。たたき合った肩は、遠く、否近い国からきた我々と山路を共にした鳥居君等であった。何よりと一段階がそれなりに成功した喜びもあり、又、国は違っても、山に志を向けた我々山人のみの歓喜でもあった。

ザイテングラートをおり潤沢キャンブ地へ着いて、久し振りの焼肉に又忙

しい。

半円形の天空にはまばたきばかりの星がはつきりと数えられさうだ。オレンジ色のキャンブ地では、哀調の韓国民謡が、心ゆくばかりにこだまする。これから北穂の稜線と前穂の各峯にといさみ登つた。

いよく／＼槍への道である。三日間の停滞は、日本北アの聖地に入った修験者の如き日々でもあった。この地をして日本の今日の山岳界たらしめた原野である。潤沢谷は、日本の山を知る深奥でもあらうか。

眼ざめるばかりの紅葉にのんびりしながら、横尾から槍沢を行く、一俣小屋を過ぎて槍沢小屋で泊つては、赤沢山のモルゲン・ローに心ときめくを覚え、開ける展望は唯一の槍の三角峯にそく／＼のみだつた。登れども達せぬ急坂を唯登るのみである。いよく／＼槍の肩についてその頂上に立ったのは一〇月二七日の午後三時四〇分であった。

頂上に立った五名は、各々四方を向いて。ささぎる何物もない展望を心ゆくばかりたのしみながら、何を語り何をうたったのであらうか。

遠く近くに広がる山山。そこにはささぎるへだたりが美しくのみ感じられ、我等のついでが、唯たのしきものであった。時を忘れたたずみはまっかになった。加賀白山の夕空をさめる時、語らぬ友と、つれ立って下山を急いだ。

冷たく、静かな、山空の家で語り合う話は、深みを知らせてくれる。もう心残りはないさっぱりとした気持がおよせて来ながら、一人一人と、暗やみの外にでる。かすかに見えるやうな奥穂、そして前穂の稜線は、過ぎた日の語り草を伝える。それから西岳を過ぎて大天井への道をたどった。

× × ×

日はとっぷりくれた。突然はた／＼と、ひびくやうな物音は風車のまわる音であった。六五年の北ア大天荘の最後の客となった我々は、ウズきたないひげ面のおかげで敬遠されながら、やと部屋に入れてもらってからは、のしきコタツ部屋の一夜であったのだった。

韓国の山稜のやうな花崗岩がみられる山路をたどり乍ら、右手に雄々しく展開する穂高の連峰を貫きつ、常念への路がつづいておった。

一俣溪谷をおりる時には、韓国の雪岳山溪谷をおりる気持で、一条の郷愁を感じられる。

そして上高地の最終バスに乗った時は、遠く／＼何時迄も立つてくれた平林翁の姿が、名残り惜しき北アの山峯と共に、何時迄も美しくあたたかくのみに刻まれた。眼頭があつくなるのをささぎるのは、私のみではなかったであらう。

そして又新しき山、これは同じ山でも時が違ふ近き山、たのしき山として何時かの日、又みるであらう。(終)

◆チェコ隊の活動◆

二五〇号でチェコ隊のHKでの活動を紹介したが、Maz/Die Alpenで追加情報があったのでお知らせする。登ったもので高度のわかったもの。Kohle-Hared(6849 m)、Kohle-Jaune(6186 m)。

尚、1965 July には五人のチェコ隊が、パールのトランスアライに入り、最後のC/O (6800 m) から Pic Lenin (7134 m) へ登ったとある。中に婦人が一名参加している模様。(IY)

“Sikkim” 関係新著

Dr. Blanche Christine Olshak の新著「シッキム」が来た。彼には「Erde der Götter (1960) 及び Bilder tibetischer Kultur (1965) の既著がある。



図書紹介

川内山とその周辺

笠原藤七著

新潟県中蒲原郡村松町に住む古い会員も、東京の岳人は、どの辺にある山なのか殆んど知っている者はあるまい。

村松町の東南につらなる栗ヶ岳(882.7m)、矢笠岳(837.5m)、青里岳(1215.5m)、五領谷岳(1187.7m)日本平山(1081.1m)等の山々のこと、一番高い栗ヶ岳でさえ1890年に足りないが、今でも夏道のないところが多く、猛烈な数に蔽われているため余り登られていなかった。著者は大正の末期から、この郷里の山々に限りない愛情をそそぎ、四季に亘って幾度となく、これらの山々に足をかけた。

そして、その山々が一番美しく且つ山登りに適するのは、四月下旬から五月末までの、豊富な残雪に包まれた時季だと述べているが、挿入の写真からも、そのことがよくうかがわれる。

著者は多年に亘るその経験から本書を記したのだが、この山群の概説等に四十余頁をあて、七十余頁を山行記録にさいている。一番よみこたえがあるのは、記録の部分であらう。最後の民俗、伝承などが20頁加えられている。

口絵の写真13葉、本文中にも写真や概念図が多く挿入されている。この山群の理解に便ならしめている。たゞ巻末の折込地図には、山々の標高が記入されていないのが惜しまれる。

尚希望者は新潟県村松町清水書庫へ申込み、頒価三五〇円、郵税50円で入手できる。(昭和40年10月30日発行、A5版一四二頁)(望月達夫記)

◇足引 第三号◇

国学院大学山岳部OB会
国学院大学体育会山岳部

創刊号は三十六年に、第二号は三十八年に出た。そしてこんどは四十年に第三号である。やっかいな部報発行を着実に努力は大へんなものだと思ふ。

今号は三十八年度後期より四十年度前期までの記録を取っている。編集者の言によれば、岩登りだけの記録は今回省いたとのことだが、編集はそれだけに特色が見られる。

内容はまず、単独行三篇、八冬・燕より槍ヶ岳へ、聖岳を越えて、富士山大沢左岸の登攀。それから「越後の山脈の記録」として四篇がある。△恋ノ岐沢から三國川へ、八海山より平ヶ岳を経て尾瀬へ、越後駒ヶ岳より丹後山を経て三國川へ、水長沢より鷹ノ果へ。周知のように越後の山は地形、天候ともに険悪をきわめるが、人数ながら地味でねばり強い活動が報告されている。

右のほかに「十勝岳・トムラウシ・大雪の旅」「トッターツの山」から「羅臼岳偵察報告」この北海道の山々の記録や、「白馬大池から鹿島槍(冬)」などの紀行が目につく。

羅臼岳偵察報告は、冬の知床山脈全縦走計画のための調査であるが、知床での経験を将来の海外遠征のために生かしたい考えのようである。前期「越後の山」の集中記録その意味で注目される。長い歴史をもつこの学校の遠征が早く実現することを期待したいが、同時に十分特色のあるものであってほしい。

数多い記録報告の中に、つぎの三篇(次頁上段へ)

の論説がある。八現役諸君に要望すること、リーダーとしての感想、山岳部と夢、いずれもこの大学山岳部のもつ精神的骨格を知ることのできる好論文である。

話が前後するが、冒頭の約三分の一は古い先輩、教授の執筆が並んでいる。内容を抄出すると、回想風のもの（外蒙古への回想）、古典を題材としたもの（御嶽山—その歴史と信仰について、峠の神について）、随筆風のもの（続・秋山のささ、山で出合った人々）などであるが、ここにもこの学校独自の精神的基盤がはつきりと現れていて興味がある。問題はこれらの基盤の上に立つ現役諸君の今後の活躍ということであろう。

（古沢 肇）

昭和四十年十二月二十日発行、A5版、二二頁、写真八、図版一〇、編集責任者隆旗、非売品。

ハリーンの死

ハリーンの死

この間アイガーで死んだ John Harlin は「スタンフォード」では N.B. Clinch の後輩である。Tom Frost, Royal Robins などとともに「アメリカが生んだ一流のクライマー」。一九三六年の生れ。山男というのは、これからという時に死ぬか、いつまでも長生きしているかのどちらかで、中途半端で消えるのは余りない。

彼の最近の寄稿は「Aiguille du Dru, Directissima」(AAJ, 1966, 来年の分)「Zwei Erstbesteigungen in Mont Blanc-Massiv」(Die Alpen, 1. quantal, 1966) 尚、彼の登攀略歴については山溪の六月号に書いたから御覧願うたい。

（IY）

畦地梅太郎著

山の出ベン

山の本には、読まねばならぬ本と、そばに置いておきたい本との二種類がある。ガイドブックや古典としてつたわっているものは前者、読むと楽しくてしようがないというものは後者となる。この間出版された畦地さんの本は後の方に入れてよいと思う。

「わたしの書く作文などというものは、文字をこさらに、長ったらしくう並べたもので、まことに、なんの役にたつものでもない。まして、山の作文などというものであっても無くてもいいような作文である。ちやうど、出肺のおかしさにも似たおかしげなものである。」

これは後記の一部である。お手のものの多数のさし絵と三枚の別刷の絵の中に、楽しい文章がちらびついているのである。内容は殆んど紀行文である。

この本を読んであらためて感じたのは、畦地さんという人は正直でまじめな人だなあ、と言うことなのである。いまさらこんなことを記すに著者に笑われるにちがいないが、そのまじめさが今日の版画家畦地梅太郎となったのではないかと思う。余興の山の作文がこんな楽しく書いて、それをまとめて美しい一冊の本ができたという

ことは、読者がよるこぶことは必定であるが、その影で著者の畦地さんも気に入った本ができたわい、と心ひそかによろこんでおられるのではないか。

「わたしは麦わら帽子をかぶった山登りをはじめてだった。使ってみるが、ぶなかな具合がよかった。わたしがかぶった麦わら帽子というのは、京都の親戚、お寺の息子で、大学の勉強そっちのけで年中山へ行っているのがある。帰りに東京のわたしの家で骨休めする。京都の親戚から、なにばや

やしとる、早よう帰らんかと、電話がかかってくるまで腰を上げんありさま。そのお寺の息子の置土産の古麦わら帽子であった。

これは著者が北アルプスの尾根で舞っている蝶をとうとう、麦わら帽子をふりまわす段があるが、その帽子の説明なのである。

B5版、本文二五五ページ、昭和41年1月25日、東京、創文社発行 定価一〇〇〇円、ほかに限定版一〇〇部（小野 幸）

陸奥の吹雪

八甲田遭難軍人の

雪に捧げる

陸上自衛隊第九師団

明治35年1月23日、青森の第八師団第二大隊は雪中行軍を、この八甲田山に行ったが、大自然の猛威の前に、山口大隊長以下百九十九名が凍死するという大事件があったことは、「遭難始末」をはじめ数多くの資料によつてうかがうことができるが、この書は昭和40年の遭難の63周年にあたり、青森の自衛隊が「八甲田演習」を計画し、当時と同じ想定、経画で、一カ月おくれの2月23日に慰霊雪中行軍を実施した記念出版なのである。

内容は第一部から第三部までに分けられ、第一部は本書の中心部となっている明治35年の八甲田遭難の経緯を明らかにしたものであり、第二部はこの特別に弘前から歩兵第三連隊が八甲田山行進をして成功したこととこの編者である自衛隊の行なった昭和40年の雪中行軍の成功報告とがあり、第三部は資料篇として、第五連隊遭難者名簿、第三連隊参加者名簿と一般参考資料となっているのである。

とにかく、とりたてた内容ではないがまじめな、わかりやすい編集であり、八甲田遭難資料の新しい資料として特記してよいものであろう。なお、参考資料の中に、「第五連隊遭難始末」（北辰日報編、明治35年3月近報書店発行）、「雪中行軍記」（東京発行、當時の青森武勇、明治34年4月発行、当時の雪中行軍の貴重な一資料として）、「青森衛戍歩兵第五連隊第二大隊雪中行軍遭難写真」（陸地測量部編、明治35年2月発行）、「八甲田の思い出」（泉館久次郎編、昭和10年1月発行）、「八甲田遭難記」（陸上自衛隊第九混成団本部編、昭和35年1月発行）、「雪中行軍遭難60周年誌」（青森市史別冊（青森市史編纂委員、倉倉弥八、昭和35年5月青森市史編纂室発行）、「八甲田山麓雪中行軍秘話」（吉米地吉重著、昭和5年8月初版、昭和37年8月再版、福沢善八発行）、「歩兵第五連隊第二大隊雪中行軍遭難」（村松文向著、昭和40年1月）などのあることが示されている。

B6版、一〇四ページ、昭和40年6月23日、陸上自衛隊第九師団発行 購写印刷限定三〇〇部、非売品（小野 幸）



（五頁三段より）

中戸 正宜21
浅川 安隆27
篠 昌弘21
友田 武夫20
中 彦士43
Curadeo Rusero
Mario Puig
Luis Allende
以上で登山報告を終ります。

ヒンズー・クシュ情報

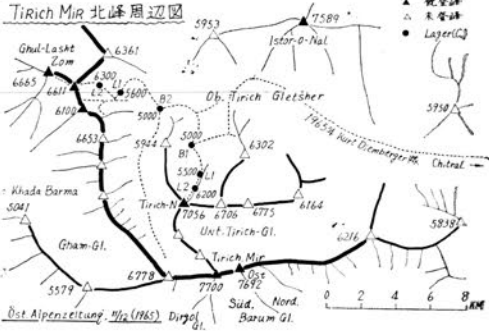
オーストリア隊の Hindu Kush (1963) が判明したので要約御紹介する。ティリッチ・ミール北峰が登られているのである。（略図参照）

隊員 Kurt Diemberger, Herwig Handler, Franz Lindner, Maria Antonia (隊長の夫人)

登山成果
8/19 Ghal-Lash Zom 東峰 (6611 m) 隊長 H.H., F.L.
8/20 同上主峰 (6665 m) H.H., F.L.
8/20 P. 6100

隊長夫妻
9/4 Tirich Mir 北峰 (7056 m) 隊長 H.H., F.L.

その他の成果
上ティリッチ氷河、ティリッチ・ミール北部群とグルラシネトゾム山群の踏査。
右地域の地図作成。
展望写真 16mm 映画。（古沢 肇）





会員通信

グルジアだより

深田 久弥

トルコ・ソ連共和国(ソ連)主都アシニカバードを飛行機で発つて、カラ・クム砂漠、カスピ海を横切つて、油田都市バクーに一時着陸、それからコーカサス山脈を見ながらグルジア共和国の首都トビリシに着きました。ヨーロッパ風の古典的なおちつた都会です。グルジアは世界最古のブドウの産地とか。ワインがとてもおいしい。これからトルコに戻り、一途東進の予定です。(一九六六年三月十七日付)

天神峠

会員番号・五四三
五十嵐 力

新春の谷川連峰を眺めに天神峠に登って見ました。

調子が良かったら天神尾根から頂上を踏んで来ようと思つて出かけたのですが、四日間の滞在中三日間の猛吹雪で、時間的に無理なものと、地元の人達の遭難防止にとても気をつかわれてゐるのを見て、峠からながめて来ました。毎年(今年で六年目)訪ねては冬山の気分を満喫してくるのですが、ピッケルなど持っているのに、山に登るん



ケープタウンより

―南極の帰途―

村山 雅美

お便り有難う。四年ぶりの昭和基地から四年ぶりのケープに帰って来まして。緑と花のこゝは、何時来ても美しい処です。

何よりおどろいたことは、Mrs. Henderson の Xmas Card をうけて

来たこと。何でも十二月頃こゝへ来て、日本の南極船はいないかと探し廻った由。何時もクリスマス前後に宗谷が来ていましたからね。そうだと、一九六〇年の十二月だった。ヘンダーソン夫人が、ベルからケープタウンに入港するというのをきいて、

丁度入港中の宗谷で、心まことに待っていた処が、ヘンダーソン夫人の船がおくられて、たしか一日ちがいで会えなかったことがありました。こんどもその二の舞だと夫人はいってしまいました。残念しごくに思います。

ヘンダーソン夫人の二女 Jane がダーバンに嫁いでいて、その家族に会いに来たのだそう。しかしいつも元気そうで何よりと思ひました。

ことしの南極は大異変か、氷が全然楽でなし。宗谷でもスイスイとけたと思います。新砕氷船「ふじ」では、力あまり十分に実力の程

をつかみ得ませんでした。

南極の山のぼりの計画はいかゞですか。丁度オプザバーとして乗ってきた、USA の H. Francis (American Alpine Journal) の一九六五年 Antarctic Why? をかいていた山屋)と二ヶ月間くらし、南極の山も大分語りました。結論からいうと、この二年位は輸送を US Navy でやる限り USA は勿論どこも不可能のようです。

ですからもしやるとすれば、New Zealand は今年 C-130 の輸送機を三機購入して輸送を目前でやれますから、NZ が先鞭をつける可能性が有ります。しかもすでにカンタベリー大その他が毎年ビクトリアランド等の山をやっていますから動かない筈はないと思います。

ネパールの解禁のニュースをみました。いよいよ忙がしいですね、御自愛を祈ります。お目にかゝる日を愉しみに、会の皆様によろしく。(三月二日付ケープタウンにて、松田宛)

TERRE DE FEU 情報

「Die Alpen」, März, 1966 によると、アンデスの南端「フエゴ島(火の島)」にある Buckland (1800 m) 峰が、イタリーのマウリ(Carlo Mauri, 一九五八年、W. ボナッチイと G. IV 初登頂)が参加してゐるレン・隊(Uccello 地名)に登られたそう。この山は今年の北大バゴニア隊の目標の中にも入っていたと思うが、彼らはどうしたのだろうか。

バックランド峰は、マゼラン海峡の南岸に近く、アグステイニ(De Agostini)水道に臨む氷峰で、一九五九年、イタリーのマエストロリーとオーストリアのトニー・エッガーが登り、下降中後者が墜死したセロ・トルレに

も比すべき難峰だという。

イタリー人は、南部バゴニアの探検家アグステイニ(1868-1960)以来、この僻地でも活躍し、前には、サルミエント、モンテ・イタラ、バイネ南峰などに登攀、今度バゴニアに加えて更にアグステイニの栄光を高めた。(吉沢)

御礼

ピッケルの名工、山内東一郎翁には、かねて、仙台鉄道病院にて御静養中のあるところ、急に病状を悪化され、四月四日朝、肺症に気管支拡張症を併発されて、逝去されました。火葬にあわれた翁の仕事場及び御住居が、一日もはやく再建され再び『山内ピッケル』が世に送られることをねがう、ひろく全国の方々の御高志によって、また、野呂建設、野呂貞敏氏の全面的な御援助もいたたくことができて、一望のもとに、仙台平野と海を見わたす高台(仙台市長町字越路一九の七二九番地)御住居が完成するまで余すところ、あと数日というときに、翁が永眠されたことは、とりわけ遺憾のきわみであります。

翁の御葬儀は、あと数日で完成する御新居に、御遺骨を御迎えた後、とり行われる予定でございます。また「山内東一郎翁をはげます会」事業の経過につきましても、後にあらためて報告させて頂きたく存じますが、ここに、皆様からお寄せいただいた、御協力にあつく御礼申しあげると同時に、とりあえず御通知申しあげる次第であります。

一九六六年四月四日

「山内東一郎翁をはげます会」

発起人代表 伊達 篤郎
事務局 仙台市表小路一〇
仙台市役所広報課内



Hey!
you are going
on a wrong way.
you are now
on a sea of cloud!

主な海外登山隊

一九六六年—I

(1) 日本山岳会学生部隊

活動区域 アラスカ、カナダ、米
目標の山 ハンター(四四四二m)
ハンチントン(三七三〇m)
チヌガッチ山群

ロブソン(三九五三m)
レイニア(四三九二m)

隊員 錦織英夫(隊長、25、学習院
大学)、磯須須彦(24、慶大)、石
川弘(23、学習院大)、小川武(23、
芝浦工大)、久保田保雄(23、明
治薬大)、佐村雄三(23、専修大)
村山和哉(23、学習院大)

(2) 芝浦工業大学隊

活動区域 ベル・ワイフ・シュン山群
及びランカ山群他
目標の山 シュラチコ(六二六五m)
ロンドイ(五八八三m)

ワスカラン(六七六八m) 東壁
隊員 加藤幸(隊長、53)、大江幸雄
(34)、鈴木隆(29)、石鍋元章(22)

栗原彬(20)、梅村隆雄(20)、宮
原博通(20)

(3) エーデルワイス・クラブ

(4) 東北学院大学隊

活動区域 アフガニスタンのヌリス
タン地区及び西部 H.K.
登山目標 コー・イ・パンダカー
(六六六〇m) シャーフラディ
(五一四三三) その他。

隊員 板橋元一(40) 他九名(内現
役二名)

(5) RCC II 中央アジア隊

活動区域 中部及び東部 H.K.
登山目標 コー・イ・パンダカー
(六六六〇m)、ニコラス峰(六五
〇四m) その他。

隊員 安川(長城) 茂雄(隊長、40)、
青柳健(35)、白旗史朗(33)、石井
武(30)、堀田弘司(30)、藤田敏三
(28)

(6) RCC II コーカサス隊

活動区域 コーカサス(カフカズ)
登山目標 シハラ(五二二一m)、ウ
シニバ(四七二〇m) 他

隊員 上田哲農(隊長54)、松本竜雄
(34)、奥山章(40)、青野泰典(32)
車義久(25)、松島利夫(25)、田中
敏雄(32)、服部満彦(34)

(7) 日大三高OB隊

活動区域 ハル・アンデス

(隊員四名、詳細不明、エーデル
ワイス隊と同じ船で出発した模様)

(8) 日大 隊

活動区域 グリーンランド
登山目標 フォレル(峰三三六〇E)
隊員 中島啓(ひさし、隊長) 他五
名

(9) 神奈川県岳連隊

活動区域 アフリカ
登山目標 キリマンジャロ(五八九
五m) 他多数。

(10) 教育大隊

活動区域 アラスカ
登山目標 ランゲル山(四二六七m)
その他、千葉大(H.K.)立教大(コ
フス) 緑山岳会(アンデス)等あり
詳細次号。

Peaks of Caucasus

arranged by I. Yoshizawa

峰名	高度 m	初登 年	国別	北峰	南峰	東峰	西峰
Elbruz 西峰	5633	1874	Br	Khrumkol Bashi	4675	1889	Br
(Minghi Tau)				Ulu Tau Chana	4203	1903	Br
" 南峰	5600	?	?	Shchurovsky	4200	1915	R
" 東峰	5595	?	R	Dikhlos-mta	4189	1892	D
Shkhara 東峰	5201	1888	Br	Latsal Dash	4175	1890	I
Dykhtau 東峰	5198	?	?	Bashli Tau	4170	1929	Öst
Pik Rustaveli	5190	?	?	Addala-shnogshoi	4140	1892	D
Koshlan Tau	5145	1889	Br	Isforda	4138	1890	Br
Shkhara 西峰	5057	1903	D	Gadli Tau (1)	4135	1929	Öst
Jangai Tau 西峰	5051	1868	Br	Bash Kara Tau	4129	1914	Sch
Kazbek	5047	1868	Br	Bokhokh-meer	4120	1892	D
(Mukinvalzeili)	5038	?	?	Sweigar Tau	4109	1929	Öst
Jangai Tau 東峰	4985	1888	Br	Ankhowala	4098	1892	D
Katun Tau	4928	1934	Sch	Kosaraku	4091	1929	Öst
Mishiri 西峰	4918	1889	Br	Tomaschi Tau	4090	1929	Öst
" 東峰	4880	1886	Br	Bashlikol Bashi	4077	1929	Öst
Kunjum Mishiri	4859	1886	Br	Mingikol Bashi	4060	1914	Sch
Gesolia	4853	1887	D	Pik Kaykaz	4048	1929	Öst
Ternul	4853	1887	D	Zalning	3992	1910	D
Gimari Khokh	4778	1891	D	Laila 中峰	3986	1889	I
Ushba 南峰	4710	1903	?	Kewish Tau	3980	1910	D
				Laila 北峰	3976	1889	Br
				Pik Woolley	3960	1896	Br
				Jan Tugan	3931	1914	Sch
				Andirchi	3914	1910	D
				Mazeri Tau	3900	1904	R
				Jaloff Chat	3870	1904	R
				Zilga Khokh	3854	1852	"
				Bella Kora	3851	1904	"
				Sutra Tau	3849	1910	D
				Gumichi Tau	3806	1874	"
				Kun Lube	3805	1896	Br
				Dashi Khokh	3770	"	I
				Lakra	3730	1890	Br
				Klyka Kara Tau	3715	1903	Br
				Amankava	3674	?	?
				Shoda	3609	1887	Br
				Mashkin	3570	1894	"
				Gulba	3210	1887	"

以上私のコーカサス年譜作成の副
産物であるが、当面の仕事が一段落し
たら、最後の仕上げにとりかかろう
と思つた。これも賑やかになりそうだ。
大いによつて貰いた。 (吉沢)



台湾の入山許可は

近年台湾登山を希望する会員が多くなり、その手続きについて会への照会もありますので、新しい手続きなどをお知らせいたし参考に供したいと思ひます。

台湾へ登山計画をお持ちの各位には受入れ側の実情を熟知の上で登山申請手続きをされますよう希望いたします。

◇

一、新たに入山許可申請の原則的なルート

(イ) 登山計画書二十部、ならびに日本山岳会の推薦状三部添付の上在日中華民国大使館提出

(ロ) 計画書は本国に送られ検討され教育部で最終的に招聘を承認する

(ハ) 承認された計画に対しては、在日大使館から本人に招聘承認状が送られる

(注) 原則的なルートだけを示しましたので細部に亘る多少の違いはあるものとお含み置き下さい。

二、従来と異なる点

従来は、台湾山岳協会が本国での窓口として日本からの計画書の審議、政府関係機関などへの連絡、招聘状の承認申請を行っていたが、今回からは在日中華民国大使館が窓口とな

って、正式外交ルートにのせることになった。

三、申請に必要な日数

出発まで少くとも三ヶ月の余裕を見て、在日大使館に計画書を提出のこと。

四、その他のメモ

(イ) 登山目的での入山期間は二週間である。学術調査の場合はこの限りではない。

(ロ) 甲地区入山許可は外国人の場合には台北警察にて取得。

(ハ) 乙地区入山許可は、現地入山検門所で申請取得(外国人はパスポート必要)

(ニ) 正月休みを利用して、この期間に台湾へ登山する隊が多い傾向ですが、受け入れ側の台湾の山岳協会は、中国の習慣からこの時期は同行メンバーを出しにくいという実情から、正月の時期には日本から一、二隊ぐらいにして欲しいとの意向が伝えられています。

付記

① 昭和四十一年冬期の登山申請は、すべて保留になりました。これは受入れ側の態勢ばかりでなく、国内事情によるものも多くあると推察されますので、現状として、台湾への登山の目的で入山招聘承認書を取得するのは困難であるとしてよいと思われまふ。

② 消息通の伝えるところによれば、去る二月、本国では関係筋で外国登山隊の入山許可について検討した結果「玉山」「雪山」以外の山への登山目的で入山の場合、近々普通ビザでも許可する模様である、ということである。

③ 日本山岳会宛、台湾山岳協会からの公文書を添付いたしますから参考にして下さい。

大沼博美

台湾山岳協会からの公文書

台体岳総字第一四六号

中華民國五四年(昭和四〇年)

二月一〇日

日本山岳会殿

中華民國台湾省体育会

山岳協会会長 周百鍊

一、查台湾省玉山等地区因前尚未設立國家公園經奉敵國官署指示就當地觀光設備情形及安全上之顧慮尙不宜准外國觀光旅客前往攀登等情

二、貴會會員有疑來華攀登大山者請由貴會向敵國駐

貴國大使館申請轉請敵國官署交本協會代弁來華登山入境手續較為適宜

三、函請 查照

「富山県登山届け出条例」

既に新聞紙上その他で御承知のことと存じますが、富山県議会で、四月二十三日、全国ではじめての「登山届け出条例」を可決しました。此の条例の施行については、種々是非もあり、運用面については、問題も多いことと思われまふが条例が施行になった以上、我々登山者としては、この罪則が適用される様なトラブルを起さぬ様、この条例の趣旨を正しく理解した上で充分に注意する必要があると思われまふ。ここに鈞・立山方面に入山される會員各位のために、参考迄にこの条例の全文を掲載して會員各位の注意を喚起したいと存じます。

富山県登山届け出条例

(目的)

第一条 この条例は、富山県の区域内にある山岳のうち、特に危険な地区及び期間に登山しようとする者(以下「登山者」という)に対し、登山

届を提出させることにより、山岳遭難、防止及び遭難時の対策に資することを目的とする。

(登山者の心構え)

第二条 登山者は、適正な登山計画を作成し、その計画に基づいて装備、食糧等を整え、登山しなければならぬ。

(危険地区及び期間の指定等)

第三条 第一条の特に危険な地区及び期間は、知事が指定する。

2 知事は、前項の指定をしたときは、その内容を告示するとともに、登山口に掲示する等の方法によつて周知を図るものとする。

(登山届の提出)

第四条 登山者は、次の各号に掲げる事項を記載した登山届を二通作成し、知事に提出しなければならない。この場合において、登山者が集団で登山するときは、代表者が提出することができ。

一 住所、氏名、性別及び年齢

二 登山歴

三 行程及び日程

四 日程中の行動の概要

五 装備及び食糧

六 緊急時における連絡先

二 前項の届出は、特に危険な地区に入入る日の二十日前までにしなければならない。

三 登山者は、入山前に前項の登山届の記載事項を変更したときは、遅滞なくその旨を知事に届け出なければならない。

四 遭難救助に従事する者その他知事が特に認める者については第二項の規定は適用しない。

(登山届済書の交付)

第五条 知事は、前条第一項の規定により提出された登山届を受理したときは、登山届済書(以下「届済書」という)を登山者に交付するものとする。

とする。

二 知事は、登山届の内容が不適当と認めるときは、届済書を交付する前に登山者に必要な勧告をすることができ。

(届済書の提示)

第六条 登山者は、常に届済書を携行し、知事の指定する登山指導員(以下「指導員」という)からの提示を求められたときは、これを提示しなければならない。

二 指導員は、登山者の装備等が届済書の記載事項と相違すると認めたときは、必要な勧告をすることができ。

三 指導員は、前二項の規定により届済書の提示を求め、又は必要な勧告をするときは、その身分を示す証書を携帯し、関係者の請求があつたときは、これを提示しなければならない。

(審議会の設置)

第七条 第三条に規定する特に危険な地区及び期間の指定並びに第五条第二項に規定する知事の勧告の基準その他必要な事項を調査審議するため、富山県山岳遭難防止対策審議会(以下「審議会」という)を置く。

(組織)

第八条 審議会は、委員一五人以内で組織する。

二 特別の事項を調査研究するため、必要あるときは、臨時の委員を置くことができる。

三 委員及び臨時の委員は、学識経験のある者及び関係行政機関の職員のうちから、知事が任命する。

(会長)

第九条 審議会に会長を置く。

二 会長は、委員が互選する。

三 会長は、審議会を代表し、会務を総理する。

(次頁下段へ)



支部情報

一九六六年度

支部総会報告(一)

富士支部長 中田 勇 吉

去る四月一日(金)午後六時より富士市才町富山荘で開催しました支部総会の議事につき取まとめてご報告申し上げます。

総会議事

一九六五年度行事報告 承認

一九六五年度決算報告 承認

一 会費変更の件

一九六六年度本部会費が四月二三日の本部総会で一六〇〇円(現行一三〇〇円)に変更される予定なので、それが可決された場合には支部会費を四〇〇円(現行三〇〇円)とする場合には本支部会費は二〇〇〇円(現行一五〇〇円)になります。

一 役員改選の件

総会通知で委員、監事候補者を推薦しましたが、全員承認されました。その後直ちに役員会を開き、委員互選の結果、次の通り決まりました。

委員長 若林啓之助
常務委員 赤間 義健
石坂 久忠
河内 清
浜田 文二
青木 昭三
委員 野島福三郎

山崎 秀直
植木 忠夫
監事 木津 誠一
藤平 彬文

一九六六年度予算案の件 承認

支部顧問推薦の件
年次懇親会で話題となりました様に昨年本部で行われた日本山岳会創立六〇周年祝典において永年会員として表彰されました会員の内県内在住及び富山県出身会員の下記の方を支部顧問として、推薦申し上げます。

河合 良成氏 田部 重治氏
牧野平五郎氏

尚、五月一三、一四、一五日頃を予定して上記の方々を馬場島にお招きする計画を立案中です。いずれ決定次第ご連絡申し上げますからぜひぜひご参加下さるようお願いいたします。

ご連絡事項

かねて当支部は富山県山岳連盟の加盟団体でしたが、昨年富山県山岳連盟が全日本山岳連盟に加盟したことで、組織を異にする日本山岳会の支部として加盟している意味を失いましたので県岳連を脱退しました。

然し本年四月より全日本山岳連盟が解散し、日本の山岳界を一本化した日本山岳協会が発足することになりました。日本山岳協会は府県単位の連合体となりますので、こゝに本部からの要請もあって取りあえず富山県山岳連盟の一員となることとしました。四月一日県岳連側の諒承を得ましたので支部は再び県岳連の加盟団体となった次第です。以上ご報告申し上げます。

尚、支部顧問推薦行事は今年十月末を目標に準備をしていますが、その後顧問方のご都合によって、秋の紅葉時まで延期することに致しました。従って一〇月二八日一三〇日(日)を予定しています。

新着海外図書雑誌

Journals Arrived in March, 1966

1. G.O. Dyhrenfurth: Himalaya-chronik 1965.
2. till falls 1965, Svenska Fjällklubbens Årsbok 1965 Årgång 37
3. Alpinismus, Februar 1966.
4. Der Bergsteiger Heft 5, 33-Jahr gang, Februar 1966.
5. La montagne et Alpinisme/Decembre 1965.
6. Jahrbuch des Deutschen Alpen-Vereins 1965.
7. Mitteilungen des Deutschen Alpen-Vereins 18-Jahrgang, Januar 1966.

ジャーナル紹介

till falls 1965

(Svenska Fjällklubbens Årsbok)
英訳すれば Swedish Alpin Club Journal 1965 といったところ、スウェーデン山岳会のジャーナル一九六五年度版が届いた。

同会とは戦前は本会とジャーナルの交換をしていた。戦後は連絡がと絶えていたが、この度、本会からの連絡により「山岳」との交換が行われることになった。

全文アット紙を使っており写真が見事である。スウェーデン語のために解説は困難であるが、国内の記録の他にスイスの記事、今号には特にウーレンバールの Scrambles の解説もみられる。今後スカンジナビアの山でも目指す隊などには参考になることが多いと思われる。

Hindu Kush も登山料

アフガン旅行協会々長カン・ワット

からの一二月末の手紙によると、今後H・Kの山に登るものは、高さに応じて四〇〇〜六〇〇ドルを徴収するとの事

◇長野岳連隊の登った山々◇ -New Zealand, 1965-1966-

- 日付順
- Mt. Cook (3763 m) 12.23 & 24
 - Mt. Tasman (3498 m) 1.3~4
 - Silverhorn Ridge から登り、Graham Ridge を下る。
 - Minares (3066 m) 1.8
 - Malte Brun (3176 m) 1.8~10
 - (マルテ・ブロンと読む)
 - De la Beche (2992 m) 1.11
 - (デ・ラ・ベッチェと読む)
 - Mt. Green (2836m) 1.12
 - Elie De Beaumont (3109 m) 1.13
 - (エリー・デ・ビュモン)
 - Hochstetter Dome (2821 m) 1.13
 - (ホフスターター・ドーム)

Hindu Kush, 1965

詳しいことはまだわからないが、昨年七月に「アメリカのシエラ・クラブ」隊がH・Kの未踏査地域に入り、5000〜5500 m の未登峰を沢山登ったという。

◇中米の最高峰

アラスカ在住の Dave Johnston, Pete H. Robinson, Vin Hoeman の三人が、アンデスへ行く途中、この二月に、ガテマラの、そして中米の最高峰 Tajumulco (3211 m) 火山の頂上で一夜を明かしたという。(吉沢)

ヒンツ・クシュの資料

H・Kにおける独、奥、伊の最近の活動はまことに目覚ましいが、特にオーストリアにはアドルフ・ディーム・ルガー(Aldolf Diemberger)がいて、

(前頁下段より)

四 会長に事故があるとき、又は会長が欠けた時は、あらかじめ、会長の指名する委員がその職務を代理する(任期)

第一〇条 委員の任期は、二年とする。ただし、補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。

二 臨時の委員は、特別の調査研究が終了した時は、解任するものとする(罰則)

第二一条 次の各号に該当する者は一万円以下の罰金又は科料に処する

一 登山届を提出しないで第三条第一項の特に危険な地区及び期間に登山をした者

二 虚偽の登山届を提出して第三条第一項の特に危険な地区及び期間に登山をした者

三 第六条の届出書の提示を拒んだ登山者

附則

この条例は昭和四一年三月三日から施行する。

登山隊、科学隊の成果をまとめて、時々、要領のいい記事を書いてくれるので助かる。息子のクルト(別稿参照)もなかなかの登山家であるようだ。

資料があとから来るので、この一、二年の間には、特に東部のバキスタン側が非常に開拓されて来た事がわかる

私が「山岳」に「H・K覚え書」を出してから、新資料の到着によって、略図その他大部訂正しなければならぬ場所のあることがわかった。いずれ少しまとまってから増補、訂正をしようと思う。

殊に昨年のH・K合併号のオーストリア山岳会報には、アドルフ・ディーム・ルガーが、各部分に分けて開拓史を書いてくれているので、大変参考になった。紹介してみたい。(吉沢)



常務理事会

日時 三月二十九日

場所 本会ルーム

出席者 加藤、辰沼、村木、大塚、松田、飯野各常務理事

議事

(1) エーデルワイス・クラブ・ペルー・アンデス隊に酸素ボンベ貸出しの件
……規定に基づき貸出すことを承認する。

(2) 学生部アラスカ・カナダ登山隊資金不足の件……五万円を指導費より支出することを承認。

(3) スイス山岳会歓迎の件
来日中のスイス山岳会、グブラー教授一行七名、本会として四月四日、北京マンションにて歓迎会を行うことにする。

(4) その他四月七日の理事、評議員会の議題につき検討した。

四月理事・評議員会

(七日・ルーム)

出席者 松方会長、渡辺副会長、理事 加藤、村木、大塚、辰沼、松田、川上、川崎、評議員 中田、津田、入沢、望月、石原(憲)、村井、監事 松本、

(以下委任) 三田副会長、川喜田、高山、荒巻、小原、後藤、日高、藤島(敏)、青木、野口各評議員

議事

(1) 通常総会開催の件、
四月二十三日、ドイツ東アジア研究協会にて開催する事に決定。

(2) 役員候補者一部変更の件

三月の理事・評議員会で承認された候補者案の中、その後、辞退されたものもあり、理事に村木潤次郎、小方全弘、評議員に藤井運平氏を候補者として推薦することを承認する。

(3) 六十周年記念展覧会の件
毎日新聞社と本会との共催とすることを決定。

(4) その他

(1) 学生部アラスカ・カナダ登山隊出発の挨拶 錦織隊長

(2) 海外登山隊に対する推薦状の発行。左記各隊の申出を承認した。

(イ) 日大グリーンランド登山隊

(ロ) 名古屋商大台湾登山隊

(ハ) 東神戸高校台湾登山隊

(ニ) 集会予定の件

(イ) 春季懇談会。

(ロ) マナスル登山頂上十周年記念小集会

(イ) 四月二十日の三水会の穂高積雪観測はシンポジウム形式を考慮

(ロ) 福島支部春山登山技術講習会報告。於猪苗代ロッジ26名参加 (川上)

(5) 会報の件。

二五一年から横書きにするか否かについて検討したが、従来通り、縦書きでいくことに決定。

(6) 会費未納者の件。

現在、会費五年間滞納者九六名、四年間滞納、一〇〇名、三年間滞納四三名、計八〇七名の滞納者があり、従来滞納者には「山岳」のみ発送停止するのみで五年間の間会報を発送していたが、昨年度はこれらの経費が約七〇万円近くになり、会の財政に大きな圧迫を加える結果になったので会報二五〇号(四月号)より、会費未納者には会報発送を中止することを決定。その旨連絡し、会費納入方をお願いすることに決定。

(5) 各支部報告

① 東京支部(石原支部長)

(イ) 都岳連加盟について

(ロ) 東京支部20周年記念行事の件

(ハ) 支部費二〇〇円徴収の件

② 富山支部(中田支部長)

四月一日支部総会を開催し、支部の顧問として、河合良成、田部重治、牧野平五郎の三氏を推薦することを決定した。(以上)

東京支部会務報告

四月六日(水) 役員会

出席者 石原、関口、山口、沼倉、小味、広谷、松永、村井田、大西、堀川、富田、武田、鈴木(和)、野萩、倉知、戸野、細井、西丸。

60周年記念展覧会(第三の極を目ざして) 御案内

かねてより準備をすゝめておりました標記展覧会が左記により開催される運びとなりましたのでお知らせ致します。お問い合わせはの上多数、御高覧下さい。様御案内致します。

記

一、日時六月十一日(二十二日)

一、会場池袋西武デパート七階SSSホール(約六六〇平方メートル)

一、内容、本会六十年史、海外登山自然保護、遭難対策、等 以上

1 報告事項

(イ) 決算報告(昭和四十一年度)

(ロ) 総会に際しての予算編成事業計画について話し合いを行う

2 技術研修会の件

五月二十一日(二十三日)まで岳沢に於て行事に決定する

担当委員 広谷、松永に決定

3 六十周年記念展に東京支部より四名、委員として沼倉、松永、小味、村井田を出席に決定する(小味)

第十二回図書委員会

四月十三日於ルーム

出席者 松田、山崎、大橋、倉知、野田、鈴木、武田、古川

議事および報告

(1) 選定図書の結果、補足する点がいぶある、反田氏に廻す(山崎)

(2) 本年度の反省と次年度の計画委員会の基本的な仕事である受入れ、管理以外の開口を拡げすぎた感があるので、直接関係ないものは他の部門に移管したい。

新着受入図書(和書・雑誌)

(40・3 受入)

(凡例) ①書名、②著者

③発行所、④寄贈者

① 岳人二九(41・4) ③ 東京中日新聞社

① アルプ98(41・4) ③ 創文社

① 山嶺四三二(40・4) ③ 東京野歩路会

① 自然保護50・51(41・3・4) ③ 日本自然保護協会

① 山恋5 ③ 法政大学女子山岳部

① シュタインマン2 ③ 帯広エーデルワイス・クラブ

① 部報12 ③ 岡山大学山岳部

① 部報7 ③ 札幌医科大学山岳部

① OMCレポート一九七(41・4) ③ ④ 奥多摩山岳会

① あしなな一〇一 北矢盛衰記、③ ④ 山村民衆の会

① 逐次刊行物目録(昭和年版) ③ ④ 国立国会博物館

① 針葉樹8号 ③ 東京南科大学一橋山岳部、④ 松田雄一

① エーデルワイス8、9 ③ 関西学院山岳部、④ 関西学院山岳会

① リュックサック8号の1・2 ② 早稲田大学山岳部、④ 近藤等

「山日記」 図書係

寄贈の御願い

本会保存用として会員各位の中で、左記各年版の余分をお持ちの方は御寄贈戴けますれば幸いと存じます。

昭和24・25・26・29年版

ウエストン祭のお知らせ

信濃支部

第二十回ウエストン祭が、左記の通り開催されます。今年も新緑の上高地へお出かけ下さい。

日時 六月四日(土) 記念山行。

七時に鳥々宿入口の橋のたもとに集合し、徳木峠から上高地入り。

2 六月五日(日) 碑前祭と記念講演

○ 碑前祭。午前十時からウエストン広場にて

○ 講演会。午後一時から小梨平のセントラル・ロッジにて

参加受付

1 記念山行参加の方は鳥々の集合場所。

2 上高地直行の方は上高地のバス待合所前にて

3 参加料は一五〇円(記念品代) 以上

H・K情報(追加) Bergsteiger 4

六理めには惜しいが、Deutsche H.K. - Kundfahrt, 1965 (2. Juni - 20. Okt.) を紹介する。隊員 (M. Keitelber, 34, Leiter: W. Frey, 23; H. Gall, 28; K. Hiller, 22; K. Gross, 31) Koh-i-Mundi 附近 P. 6010 m, P. 6121 m 未登峰発見。前者は 20. Juli、後者は 26. Juli に初登頂。尚、Sierra Club 隊の初にいた。(吉沢)

三月ルーム使用

- 一、常務理事会
- 二、東京支部役員会
- 三、常務理事会
- 七、海外登山懇談会
- 八、婦人部
- 九、図書委員会
- 一〇、60周年記念委員会
- 一四、学生部委員会
- 一五、婦人部
- 一六、三水会（グリーン）

ランド遠征報告

- 一七、常務理事会
- 一八、海外連絡委員会
- 二三、東京支部委員会
- 二八、婦人部（エーデルワイスクラブベル1・アンデス隊歓送会）
- 二九、常務理事会
- 三〇、六十周年記念委員会、婦人部

編集後記

★自ら招いた別の忙しさ
で、会報の発行も遅れ勝ちである。いま暫らくの御辛棒。それにしても若い人の奮起を望むや切なり。★「索引」も出来た。これは中島寛君一人の仕事。貴重な時間を割いてよくやってくれた。会員なら当然だという勿れ。敢えて全会員を代表して感謝しておく。
(吉沢一郎)

あなたのネガから
大型パネル(枠)張り

山岳写真を

お部屋の飾りに！
贈りものに！

あなたのネガから、明快なコントラスト適切なトリミング(構図)で、大型・美麗・パネル張り写真を製作いたします。

ネガと返送料 150 円同封でご注文下されば、到着後 5 日以内に製作発送いたします。

代金は着品後 10 日以内にご送金下されば結構です。なお代金前払いの方は弊社で負担いたします。また、特にトリミングをご希望の方はその旨明示して下さい。

但しネガ不調のため作品にご満足頂けないと思われる場合には、ネガ、代金、返送料ともそのまゝ直ちにご返送申し上げます。

■全紙半切	パネル張り	¥ 1,000
■全紙(新聞 1 ページ大)	〃	¥ 1,500
■全紙 2 倍	〃	¥ 4,000

上記以外のサイズ、または同時に多数ご注文の際は、ご照会下されば別にお見積り申し上げます。

上記以外のサイズ、または同時に多数ご注文の際は、ご照会下されば別にお見積り申し上げます。

本多写真工房 (本多善博)

名古屋市南区柴田西町 1-16 Tel. 611-7047

昭和四十一年五月十日発行
東京都渋谷区神宮前
三ノ三 外苑コーポ内
発行所 社団法人 日本山岳会
編集代表 吉沢一郎
頒価五十円
電話(03)七五〇一七五
直通(03)七五〇一七五
振替口座東京四八二九番七五
東京都港区赤坂溜池五番地
印刷所 株式会社 技報堂

登山における
人体工学追求の
勝利!!

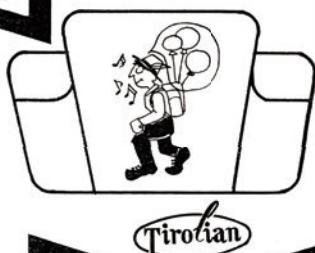
画期的な新製品

シャモニー

キスリング

株式会社 サグライ

TEL (861) 0933-5 (861) 3356-8



☆会報製本御引受け☆

製本代 (201号~250号) 金 600 円也
送料 別受け

中林製本手帳株式会社

東京店・文京区水道端 2-15, 電話 (943) 0311 (代表)

大阪店・都島区相生町 7, 電話 (352) 3491 (代表)

名古屋店・昭和区雪見町 1-15, 電話 (731) 7331 (代表)

工場: 大阪工場 (堺市), 東京工場 (戸田町)

▶ 背文字その他については往復はがきて

日本山岳会内「会報委員会」に御相談下さい◀